

Jane Richardson Hanks and Lucien
Mason Hanks,

*Tribes of the North
Thailand Frontier.*

New Haven: Yale University Southeast
Asian Studies, 2000, xlviii+319pp.

はやみようこ
速水洋子

はじめに

本書は、北部タイ山地の1960年代から70年代という変動の時代における広域調査に基づいて多民族の混住する当地の社会動態を描くモノグラフである。ローカルな北タイ低地社会や行政等の諸機関と山地の人々の多面的な関係、そして後者が低地を中心とする行政に統合されていくプロセスを描いている。フィールドノートや日記からの抜粋をまじえながら、その内容は、ジェーン・ハンクス自身の言葉を借りれば、“flat foot anthropologist”（地に足のついた人類学調査者）としての柔軟さと北部タイ山地に関する見識の広さを如実に表すものとなっており、変動の一時代についての情報豊かな描写になっている。と同時に、タイ族を中心とするタイ社会の研究から得た分析枠組み（特にルシアン・ハンクスの“entourage”を基軸とする社会関係の概念）や、文献調査に基づいた独自の分析枠組みの試みでもある。後の研究者たちが、過去完了形で「タイ国の行政が山地における森林破壊、アヘン生産、共産党の活動に抗するためとして山地民政策に乗り出し、山地は次第に低地を中心とする国家に統合されていった」と一言で表現してしまう変動の時代を、諸媒体、諸力の生き活きとした相互作用として描き出している。その意味では、現在も当地にさまざまな形でかわる研究者、政策担当者、NGOなどを含むすべ

ての人が読むべき書である。ひとつの政策、ひとつの機関、ひとつのプロジェクトや制度の導入が、この地域にはたらく諸種の力関係にもたらしうる影響の複雑さをあらわにしてくれるからである。

I

ルシアン・ハンクスは、イリノイ大学、ベニントン大学、カリフォルニア大学、ヴァーモント大学などで人類学の教鞭をとり、1988年に他界した。ジェーン・ハンクスは、コロンビア大学で人類学博士号取得以後、終生在野の人類学者として、ルシアンとともにコーネル大学のバーン・チャン・プロジェクトに参加、そしてルシアンがリーダーとなったベニントン・コーネル・タイ山地民調査に参加した。夫妻は、長くヴァーモント州のベニントンに居を構え、コーネルを中心に組織的に動いたローリントン・シャープとは対照的に、あくまでもフィールドと対象である人々に密着し、貴重な民族誌を書き、政府への提言もし、地元ベニントンの町で東南アジアからの難民の定住に奔走し、アメリカの現世代のタイ研究者達から敬愛されている。本書もそのように彼らを慕う次世代研究者の協力を得て完成したものである。

タイの人類学的研究のパイオニアであり指導的立場にあったハンクス夫妻であるが、その北部タイ山地における1964年から79年に至る広範囲な調査の内容はあまり知られてこなかった。彼らにとっては、1951年にコーネル大学のバーン・チャン・プロジェクトに、友人であったローリントン・シャープによって招かれたのがタイ研究のはじまりであった。ハンクス夫妻は、アメリカ人類学の父とも言えるフランツ・ボアズの孫弟子世代にあたるが、その研究は徹底したフィールド調査による実証主義と、文化とパーソナリティ学派に強く影響を受けながらも、歴史や生態適応など、広い視野から個人と社会の関係を捉えようとするものであり、20世紀アメリカ人類学の申し子とも言うべき良質なフィールドワーカー／人類学者である。ルシアン・ハンクスが1962年にアメリカ人類学会誌上 (*American Anthropologist*)

64)に「タイ社会秩序における徳と力」(“Merit and Power in the Thai Social Order”)を、そしてジェーン・ハンクスが1963年に『バーン・チャンにおける母性とその儀礼』(*Maternity and Its Rituals in Bang Chan*. Ithaca: Cornell University Southeast Asia Program)という、いずれも後のタイ研究に大きな影響をもたらす業績を発表した直後に、彼らの北部タイでの調査が始められたのである。バーン・チャン調査は、心理学、農業経済学、そして栄養学などの視点も取り入れ、同じ頃に行われたギアーツらによるジャワのモジョクト・プロジェクトと並んで、当時の人類学的研究の基本とも言えるコミュニティ・スタディのひとつの結実であった。そのような定点調査と比べ、北部タイ山地での調査はむしろ広い地理的範囲を渉猟する地域研究の様相を持つ。これは、同時代の山地研究が多民族の混住する当地域にあって、特定の「山地民族」の特定の村の研究を中心としていたのと対照をなす。

ハンクス夫妻の北部タイへの関心は、当初は応用的な面が強かった。タイ政府が「山地民」政策を打ち出し始めていた当時、人類学者の立場から有用な提言をすべく着手されたという経緯がある。内務省公共福祉局は1962年に、国連の肝煎りで北部3県にて山地の社会経済的状況の予備的視察を始めた。麻薬の生産と焼畑耕作の取り締まり、またインドシナ戦争の最中に周縁から国家秩序を脅かすゲリラ活動に対処することをも含め、タイ政府は多面的な山地への対策を迫られていた。視察団は、当時進められていた移住プロジェクトのみでは不十分であることや、山地民の研究センターが必要であることを提言している。これに応じる形で1964年に山地民研究センターが設置され、研究者と官吏が共同で山地の対策に乗り出す基盤となった。上述の特定民族集団の特定村の研究、という研究スタイルはこのセンターに任じられた海外の研究者の研究スタイルと、現地への要請という背景から生み出されたものと言える。ハンクス夫妻の1963年の予備調査は、アメリカのNational Science Foundationの助成のもと、丁度この当初の視察団の調査と、センター設立との中間の時期に始められた。プロジェクトの目的は、山地

人口と民族分布位置の特定、その相互関係、低地社会や官吏との関係を明らかにして民族分布と位置付けを知ることにあった。またプロジェクトを通じてタイ人の研究者や官吏の訓練養成も行われた。インドシナ戦争への関与と不可分のアメリカ援助機関の東南アジアへの関心と、当時の人類学調査者とその調査の役割について検証するウェーキンは、プロジェクトそのものがアメリカの現地での政治的意図に合致したものであったとしても、ハンクス夫妻らが1964年に提出した報告書は進歩的で、政治的干渉とは別のものであったとコメントしている [Wakin 1992, 179, 217]。

ハンクス夫妻の北部タイ山地調査プロジェクトは、タイ北部のチェンライと国境のメーサイを結ぶ幹線道路の西側、著者らが「ムアン・カム」(Muang Kham)と仮称する地域を対象とする。ここには、アカ、ラフ、リス、カレン、ヤオ、モン(ミャオ)そしてシャン、中国人(主に国民党の残党)、および低地タイ人も少数であるが居住している。調査は1964年1月に始められ、その後63~64年、68~69年、73~74年、79年の5年おきにそれぞれ8カ月ずつ行われている。プロジェクトはアメリカ人研究者や学生、そしてタイ人の若手研究者を交えて開始された。初年度にチームはメー・チャン地区のすべての村落を訪れる広域視察を行った。当時国民党がこの地域に勢力を持っており、彼らの許可なく当地を渉猟することは難しかった。実際に許可を得たものの女性研究者の広域踏査は拒否されたようで、その結果としてジェーン・ハンクスの方は広域調査ではなく特定のアカ族の村落調査に方針を切り替え、その成果は別にいくつかの貴重な論文として発表されている。いずれにせよ、この第1回の調査の結果は公共福祉局への報告書として、山地人口の分布や経済活動、そして政策提言を含むものだった。5年後の再調査の頃には既に山地民研究センターが設立されており、細かい統計調査などはむしろセンターに任せ、ハンクス夫妻の関心はメーコク川流域の社会変化に向けられ、これが後に繰り返される再調査においても踏襲されるスタイルとなる。もはや国民党の制約もなく、夫妻は村から村へ広域調査を行いながら、村落

間の移動、新村の設立やそのリーダーシップ、そして経済状況などについて聞き書きを繰り返した。そうする中でタイ行政の関与が山地に浸透していく過程をつぶさに見聞したのである。その視点は当初の政策提言のスタンスから、「山地民」とその「問題」への「対策」といった政府側の「山地民」観とは一線を画すものとなり、むしろ、そうした行政と山地の現場との関係の展開をフィールド調査によって克明に描き出し、分析していくことへと移行していったのである。ハンクス夫妻の調査はまさにタイにおける「山地民」政策と研究が形をなしていく最初期に行われたが、後に書かれた本書はその後の研究の成果も踏まえながら、調査当時、確立の途上にあつた「山地民」観とは一線を画するものとなっている。

II

本書の出版はルシアン・ハンクス亡き後、夫妻の次世代の在米人類学者の協力を得て、ジェーン・ハンクスが膨大な資料をもとにまとめたものである。巻頭にその協力者の1人であるニコラ・タンネンバウムによる前書きがあり、ここでハンクス夫妻の人類学者、東南アジア研究者としての軌跡が紹介されている。

本書の構成は以下のとおりである。

- 第1章 起源と背景
- 第2章 高地
- 第3章 ムアン・カムの新参者
- 第4章 巨人族
- 第5章 ムアン・カムいずこへ?
- 第6章 変化の風
- 第7章 災害
- 第8章 新たな背景

第1章は漢書に登場する「蛮族」への言及の変遷を概観した後、植民地時代の行政記録や旅行記、そして隣接諸国の縁辺から国境を越えた移住者への著者らによるインタビューの記録も交えて山地人口の中国西南部、ビルマのシャン州、北ラオス、そして

北部タイにおける移動の軌跡を追っている。これは北部タイへ移動してきた「ムアン・カム」の人々の記述の背景となり、彼らをより広い空間的・時間的な広がりの中に位置付けている。

第2章は、本書の表題になっている“tribe”（「部族」）という言葉を使用する理由の説明から始まる。今ではより一般的になっている“ethnic group”を用いずにあえてこの言葉を用いたのはなぜか。著者らによると、“tribal people”は出生が中国系でもシャンでもタイ系でもなく、タイ語で言う *chao naa*（水田耕作民）や *khon muang*（北部タイのタイ系の人々）に対する *chao khao*（山地民）、*khon pa*（森の人）に対応すると言う。「山地と谷間の低地の入り組んだ対象地域において、より広義な意味合いを持つ ethnic groups はあまり有用でない」としている。しかしそれだけではなく、「エスニック」という概念は、西洋における民族混住の状況を想起させるものとして回避すべきとする。著者らは「部族」という語を使用することで、それとは全く異なる社会的状況を映し出すことを意図しており、自律的な集団が他者と戦略的にかかわる状況を描き出すのに適しているとする。価値判断を含む言葉を用いながら、そうした価値を生み出すような状況を説明する道を選んだわけだ。しかし本書全体の論調が山地の特定「部族」を集団として安易に前提とすることなく、山地と低地の人々の相互作用を描くことに成功しているだけに、「民族」という逆の効果をもたらしがちな言葉を回避したのは理解できるが、「部族」が問題を解決するとも思えない。

ムアン・カムへの移住は特に1930年代から盛んになったようで、本章の後半は50年頃から著者たちが到着する64年までのこの地域の状況を描いている。ムアン・カムに居住する個々の「部族」集団と低地民や中国系移民がひとつずつ紹介される。フィールド調査と文献渉猟に基づく多くの情報が盛り込まれた章であり、特にラフ、アカ、リス、ヤオに関しては分布や歴史から実際の移住のプロセスに至る詳細な記述がなされる。それぞれの「部族」をその歴史的背景を含めて分別記述したうえで、この彼らは“uplanders”（高地居住者）として、その生態的適

応、リーダーシップ、村落間の調停等々について、ひとつの範疇として語っていく。

以上の2つの章に、本書全体の半分の頁数が割かれており、これ以後の6つの章は著者らが15年間の調査で観察したその後の変化の記述分析にあてられる。

第3章では、1960年代から当地において重要な役割を担い始めた新参者たちを紹介する。それは、森林局、国境警備隊、公共福祉局、教育、保健衛生、国連、王室、そして世界宗教など多様である。続く第4章、第5章では、この地域を揺るがしたいいくつかの要因、すなわち国民党の到来、アヘン生産、それらに対抗するものとしての救世主待望カルトの出現や、共産党の反乱とモンの反乱の詳細が描かれる。そしてそれらの当地への介入がもたらした影響の詳細と、より大きな全体の中での変化の様態が分析される。1971年に森林局は新しい集落の形成を禁止した。これが高地住民の土地利用に根本的な変化をもたらすことになり、一部では水田耕作を始める者も出てきた。

続く第6章、第7章では、1970年代初期に国民党が懐柔されるとともに、メーサロン周辺に生じた著しい変化が描かれる。第6章では、仏教布教僧の到来や、権威と法秩序の役割と権威をめぐる混乱と葛藤の中から「部族」の若手で影響力ある指導者が出現し、こうした指導者たちの多くはタイの行政機構の中で公的な地位を獲得していった様子が描かれている。それとともに、高地の人々自身がタイの教育を受けることの重要性を認識しはじめ、教育を受ける機会も増えた。

第7章は、生態的な変化のもたらす災害、特に1972年から74年にかけての干ばつ、そして当地域の村人たちがそれらの被害に対処するために駆使した多用な方法が描かれる。それらは雇用労働などの経済活動の多様化のみならず教育、社会変化や宗教変化による対応をも含む。

最終章では、変容する「民族」（ここでは“ethnic”という言葉が使用される）の情景が描かれる。民族混住の村落の出現、移動が困難になると同時に土地にかかわる態度の変化、観光産業などにより拍

車がかかる商品経済の浸透などの社会・経済的変動の中で「部族」の論理そのものが変化している。しかし最後に、さまざまな変化が高地と低地の溝を小さくするものであったとしても、やはり高地の人々は最低限度を超えた一方的同化に順応する理由は全く見出していない、と結論付けている。

III

本書は、タイ山地の調査研究の最も初期に人類学者が行った広域調査に基づくもので、ゲッデスの研究と同時代のより視野の広い当地域の記述を豊富に含む [Geddes 1976]。また、対象地域における政治的および生態的でダイナミックな変化にかかわる多様な媒体を描き出すことに成功しており、そのプロセスに関与した多様な指導的な人物の活動を生き活きと記述している。著者らは、基本的に単独の単位としての「部族」という既存の概念から離れることはないとはいえ、その視点はそうした諸「部族」それぞれの独自性ではなく、むしろそれぞれに異なる歴史的背景を持ちながらも、この地域の住民として、同一の場で生態的政治的適応の過程において同一の体験をするところにある。

しかしそうした力点のためか、彼らのコミュニティの内的ダイナミクスの詳細、特に儀礼的、政治的、行政的な、多様なリーダーシップのあいだの関係などについてはあまり言及していない。コミュニティの内的ダイナミクスの詳細は、低地からもたらされるプロジェクトや行政への対応のあり方の多様性の重要な要因であるはずだが、著者らが描こうとする地域変動の図式の中でそうした視点は犠牲にされている感がある。したがって、一方では高地のリーダーシップは「脆弱な権威」に過ぎないという断定がなされながら、他方では彼らはタイ人 (Thais) と同様に中国的影響に由来する天来の指導者をいただくムアン体系、階層性、自民族中心主義的な諸特徴を共有していく、とする。中国から大陸部東南アジアへの地域的な特性への目配りは重要であるが、そうした断定は、リーダーシップや統治機構の詳細とそれが招く矛盾への十分な言及を伴う

ことなくなされている。タイの政治組織の主要なモデルはムアンであり、それは中国的な起源（特に儒教的イデオロギー）を持つものであると論じ、しかも高地の人々はタイ国民国家により深く統合されるほどこうした諸特徴を共有していくという指摘は、山地のコミュニティの内外におけるリーダーシップの多様性の議論や、それらのタイ系ムアン、および今日の行政機構との比較があって初めて可能なはずである。また、ムアン的な体系の持続と断絶の議論には変容する領土意識への視点も必要である。それは、表題にある「フロンティア」概念、あるいは全編を通じて用いられる「ムアン・カム」という、あたかもひとつの生態的のみならず政治的まとまりを示すような地域の呼称を仮称として用いることについて、読者を説得するには必要な論点のほうであるが、これについても十分な議論がない。

若干の不満な点を述べたが、これらはコミュニティレベルでのダイナミクスの詳細な研究と、本書のような広域調査から得られる論点の両方の相互作用によって少しずつ精緻化されるべき議論であろう。地域の全体像を理解するためには、そうした往還作業こそが必要なのであり、本書はその可能性を十分

に示唆してくれている。土地や領土性の議論は特に著者らの調査終了後の1980年代以降重要になった論点である。その意味で、この2名の先達による本書は、彼らが研究者として歩んだ過去半世紀の当地域の研究の中で、動態的・広域的な視野を導入し、かつ将来の研究の視座を示した貴重な書であることに間違いはない。当地にかかわる今日および未来の世代がさらなる知と実践を展開するうえでの重要な基礎を築く著書である。

文献リスト

- Geddes, W. R. 1976. *Migrants of the Mountains: The Cultural Ecology of the Blue Miao (Hmong Njua) of Thailand*. Oxford: Clarendon Press.
- Wakin, Eric 1992. *Anthropology Goes to War: Professional Ethics and Counterinsurgency in Thailand*. Madison: University of Wisconsin Center for Southeast Asian Studies. Monograph Number 7.

(京都大学東南アジア研究センター助教授)